

★ もし、20代の若者が
★ 図書館長になったら ★



★ Actualize L-1 Team

目次

はじめに

第1章 図書館の現状分析

第2章 サービス

子どもたち対象のゲーム

図書館員の貸し出し

次世代の利用者カード

自己PRのための掲示板

第3章 施設

すわり心地のいい椅子

高級家具

次世代のカーペットコーナー

カフェ

自然光をうまく利用

職員の休憩室

第4章 職員

カウンターワークだけではなくフロアワークも充実

ロボット司書

館長と職員の距離

図書館以外のことを学べる研修に積極的に参加

第5章 資料

電子資料について

書店にないものも収集

地域情報

資料の並べ方

棚の貸し出し

おわりに

はじめに

私たちが本書を出すきっかけになったのは、2010年11月25日（木）に図書館総合展が開催され、図書館総合展運営委員会が主催するL-1グランプリ2010に参加したからです。

L-1グランプリとは、20代から30代のライブラリアンを中心に、ワークショップ形式で、それぞれの抱く図書館像を検討・発表するものであり、テーマは当日発表されました。

テーマ：抜擢人事で館長になったとき一次代に示すビジョンとプラン

あなたは抜擢人事で図書館長に就任することになりました。明日は就任初日です。関係者に対して館長としてのビジョンとプランを示す必要があります。その際のプレゼンテーションを作成し、発表してください。

私たちのチームActualize L-1 Teamのメンバーは、北は岩手県、西は山梨県から参加しました。1982年から1990年生まれの皆20代です。全員が最初に集まったのは開催日前日の11月24日の夜で、どんな課題が出されても良いように簡単な打ち合わせを行い、当日の朝は会場に一番乗りをしました。

本番ではメンバーそれぞれの特徴を出せ、コンパクトに意見をまとめることができました。結果、賞金20万円を持ち帰ることができました。

しかし、当日は各企業・団体のブースを見回ったりしたため時間がなく、さほど議論を深めることはできませんでした。消化不良であることを否めなかったのです。そこで、もう少しメンバーで議論を深め、その成果を頂いた賞金を使って発表してはどうだろうか、ということになりました。広く読んで頂けるよう電子書籍で出版し、無料で公開することにしました。

図書館関係者だけではなく、図書館利用者の方にも図書館に関心を持って頂けるようなるべく専門用語を使用しないようにし、図版を取り入れました。本書で使用している絵や切り絵は、メンバーの伊五沢、山川が作成したもので、一部はL-1グランプリ当日に使用したものを使っています。文章だけではなく図版もみて頂けたら幸いです。

チーム名：Actualize L-1 Team

チーム代表：吉井 潤（図書館員）

メンバー：伊五沢 麻衣子（図書館員）

久川 竜馬（個人事業者）

森谷 亮太（学生）

山川 真央（学生）

Actualize L-1 Teamが考える図書館の基本コンセプト

- （1）人だまりのできる図書館
- （2）今までやったことがないサービスを実施
- （3）少し現実離れしているが、頑張れば実現可能なことを実施

上記、（１）から（３）を現実的に行うために現状分析、サービス、建物、職員、資料の５方向で考えました。

第1章. 図書館の現状分析

戦後の日本の図書館の歴史を大まかにみると、学生の勉強部屋時代、貸出サービス中心時代、滞在型時代と推移するとともに、図書館数や来館者数、貸出冊数は時代とともに飛躍的に増えてきています。最近ではインターネットの普及で、情報通信技術を取り入れたサービスを実施している図書館もあります。ビジネス支援、健康・情報サービスなどに取り組む課題解決型図書館というものも出てきています。

議論の中で、私たちのメンバーは図書館勤務年数が短いためか「課題解決型図書館」を標榜しているわりには、現在の図書館界が抱えている課題を解決していないのに課題解決を掲げるのはおこがましいのではないかという意見が出ました。

身近なところでは、サービス対象の偏り、新規サービスがなかなか現れない、施設の老朽化、IT技術への対応の遅れ、資料費削減など、図書館が抱えている問題を列挙するだけでため息が出ます。

このような現状を踏まえ、今回は以下のように設定しました。

ある自治体で4年後に開館する図書館（小規模な地域館）の館長公募があり、20代のA氏が応募したところ、抜擢人事で図書館長に就任することになりました。A氏は準備室を立ち上げてチームを作り、1週間後、関係者に対して館長としてのビジョンとプランを示すことになりました。

第2章以降は、チームが1週間後に関係者に示すプランです。

【ある自治体の概要】

人口：13万人。

就業構造：工場や研究所が近隣の自治体より多く、住んでいる人の就業率が高い。

年齢特徴：年齢別人口は35歳から39歳までが最も多い。

地理的・歴史的な特徴：城跡や古墳などがあり、土器や石器が出土することもある。

交通：鉄道やバスなどの公共交通機関が充実している。東京（新宿）には40分程度で着く。

環境：開発が進んでいるが、できるだけ自然を残そうとしている。

財政力指数：1.5。

経常収支比率：88%。

図書館の現状：中央図書館と5つの地域館の6館で構成。年間図書館利用者数はこのべ25万人、蔵書数55万冊。画一的な蔵書構成になっており、それぞれの地域性がアピールされていない。地域資料、寄贈資料の収集、保存、提供体制が整っていない。今回は蔵書数10万冊予定。

利用者の特性：ビジネスマン、主婦の利用で占められている。

子どもたち対象のゲーム



おはなし会、読み聞かせ、ブックスタート等、図書館ではおなじみとなっている催しがありますが、乳幼児を対象にしたものが多い気がします。これからは小学校高学年から中学・高校生に図書館を利用してもらうことも大切であり、サービスの質を高めていくべきであると考えます。

とはいうものの、今の小・中学生は習い事等で忙しいですし、高校生になると部活動や受験勉強に時間をとられ、図書館に行く時間や動機はみつけれない。図書館に行くとしたら勉強机が欲しいだけです。赤本や青本などの受験参考書が図書館に置いてあれば口コミで生徒はやってくるでしょう。しかし、それでは図書館に置いてある多くの資料はほとんど使われません。

そこで、「図書館にあえて行く」最初のきっかけとして、家庭用ゲーム機をできるだけそろえ、決まった時間は自由に使ってよいことにします。ゲームを進めていくうち「あれ、この登場人物ってどこかで聞いたことがある」と思ったら、図書館にある人名事典を引けばいい。「これって、もしかして」と思ったら辞書辞典類を見ればいいのです。

実は、ゲーム作成にあたっては、ヒントにしているものはいろいろとあります。実在する人物や地名をもじったり、デザインを参考にしていたりします。

図書館に行けば、ちょっと調べたいことを簡単に調べることができるという体験のきっかけを作りたい。自分で調べられなかったら、図書館員が調べもののお手伝いをし、後々大人になったときに、「図書館で調べよう」と思い出してくれるでしょう。「図書館を使わないと損をする」と体験させるきっかけをつくりたい。

図書館員の貸し出し



図書館で働いている職員はなんらかの特技を持っています。語学が堪能であったり、パソコンなどの通信機器に長けていたり、特技とまでは言わなくとも何かひとつは趣味があると思います。図書館員ひとりひとりの力を発揮できる機会があれば職員のモチベーション向上、利用者サービスの向上につながります。

その方法として、たとえば館内に図書館職員の特技などのプロフィールを貼り出します。一定の決まった時間に利用者の求めに応じて図書館員が対応します。これによって利用者は図書館に対して親しみがわきますし、マスコミやウェブ上でちょっとした噂になれば図書館未利用者が図書館に足を運ぶ可能性が高まります。職員と利用者のやりとりがカウンターの本の受け渡しや予約本の受け取だけではもったいない。加えて、カウンター自体が両者に対してひとつの壁のように思えます。この試みは心理的な壁を取り除くきっかけにもなるでしょう。

具体的な例で言うと、語学の習得には時間がかかり、独学では思うように進まないこともあります。そこで、CD付きの語学参考書の貸し出しが図書館では多いので、「18時から19時の間、語学の学習のお手伝いをします」と掲示があれば、そのことについて尋ねる利用者はいるでしょう。他には、釣りが得意な図書館員がいたら利用者と一緒に土日に川釣りに行ってもよいでしょう。釣り好きな利用者が集まれば利用者同士のつながりができます。



現在の利用者カードは、本やCDなどの資料の貸出・予約状況を管理するだけのものにすぎませんが、ここにもコミュニティ創出の芽があります。

たとえば、ガーデニング関係の本を借りた人たちに、データを抽出してガーデニングや家庭菜園の教室開催のお知らせをメールで伝えます。参加者はお互い初めて会ったり、館内では見かけるけど話したことはないという状況でも、ひとつのテーマをもとに集まったため話をしやすいでしょう。

利用者カードには名前だけではなく、「ピアノ」や「フランス語」などというように特技も書いてもらいます。図書館員はカウンターのやり取りのなかで「そういえば、この前、楽譜を受け入れましたよ」と利用者に声をかけやすくなります。さらに、「今度、楽器演奏できる利用者が集まって図書館で演奏会でもしませんか」と声をかけることもできます。

また、利用者が利用者カードを落としたり、なくしたりすることがありますが、名前以外に特技も書くようにしてもらえば紛失しないよう大切に扱ってもらえるでしょう。

自己PRのための掲示板



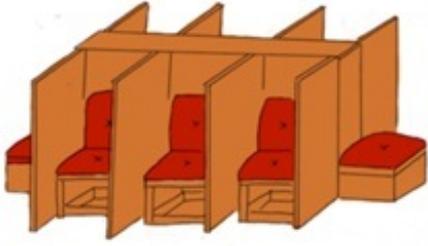
近隣施設や図書館の案内掲示板とは別に、利用者のための掲示板を設置します。たとえば、「私は将棋ができます。対局相手募集！」と利用者自身がPRを行います。後日、図書館の一角を使用して将棋大会を行います。このように図書館を同じ趣味や興味を持った利用者同士が集う場所にし、人と人がつながりを持てる場とします。

自分が読んだ本の感想やお勧めの本を自由に紹介してもらうコーナーを設け、図書館から一方的に情報発信するのではなく、利用者も情報発信できる場とします。

また、ギャラリーを設け、利用者が趣味にしている絵や写真、クラフトなどの作品を発表できる場所を作ります。たとえば、図書館未利用者がGoogleで自分の作った作品を展示できるギャラリーを探していたとします。「図書館に置かしてもらえるのだ」と発見してもらえば、作品を多くの人に見てもらえるのと同時に、今までの図書館とは違った一面を見せることができます。

65型スクリーンも用意します。図書館のイベント情報の発信だけでなく、自分をアピールしたい人が映像を作って映したり、地元の会社の商品CMを流したりと、自己PRできる場を提供します。

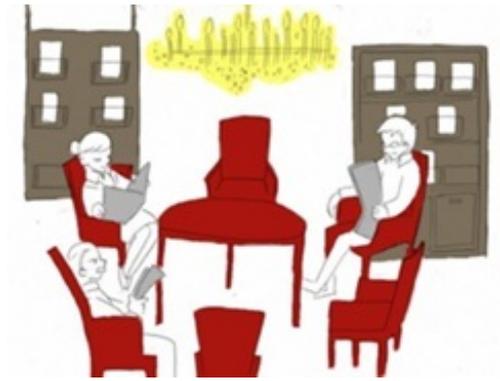
すわり心地のいい椅子



最近新規にオープンした図書館では、じっくり落ち着いて本や新聞を読めるように、クッション性のある椅子が置いてあるところがあります。クッション性のよい椅子の難点は、座り心地が良すぎるため、利用者がいねむりをしてしまうことがあることです。閲覧席が少ない図書館だと「あそこで寝ている人を起こしてほしい」と言われることがあつたりします。

一方、木製の椅子だと座り心地は良くないので、お尻が痛くなり、図書館側としては座席の回転率は良くなります。

従って、座り心地はいいが座席数はそれなりに確保したいということで、絵のようなものしかないということになります。一見、窮屈そうに見えますが、背中はおたれることができ、椅子はふかふかで、荷物は椅子の下に置くことができます。左右が壁になっているので、隣を気にしないで読書や新聞、雑誌を落ち着いて読むことができます。



ふんわりしたソファに座って、高級感に包まれながら本を読む。足元にはきれいなじゅうたんが敷いてあり、天井を見上げると豪華なシャンデリア。そんな映画のワンシーンのような空間に憧れを持った方は少なくないでしょう。しかし、今の世の中ではなかなか実現しにくい。せいぜいポリエステル製の安いソファがいいところです。

館内にくまなく高級家具を置くには費用がかかりすぎるので、一部に高級化した空間を設けます。

図書館では開館を待ちわびて外に並んでいる人が何人もいたりします。新聞をいち早く取るためだったり、席を取るためだったり、高級な空間があるところへなど、皆それぞれ行きたい場所があります。

図書館員が「開館します」と声を発しながら扉を開けると、真っ先にそのソファに向かい、後ろに倒れこむようにしてソファに腰掛けます。その豊かな質感に包まれ、しばしいやされた後で、今日やることを行う、そんな光景が見られるでしょう。

次世代のカーペットコーナー



図書館は建てられてから長く使われます。長年使われるとシミや汚れが目立つ場所があります。それは児童用図書や絵本が置いてあるカーペットコーナーです。築年数が長い所では、定期清掃されているのかを疑われるくらい汚れています。これでは不衛生で、保護者が安心して乳幼児と一緒に本を探することはできません。

これからの図書館は、カーペットの使用をやめて人工芝を敷き詰めます。閉館後、人工芝に本が置かれていないことを確認し、装置を作動させて人工芝から水を出して清掃します。噴射後は、乾燥装置が作動します。このようにすれば、毎日、子どもが寝転んで自由に本を眺めることができますし、親も安心して利用できるでしょう。

図書館には思いのほか緑が少なく、特に館内はもっと少ないというのが現状です。図書館によってはプランターを少し置いてあるところもあります。ところが、置いてあるだけで、枯れているのにそのまま放置しており、不衛生な図書館もあります。衛生面と緑を入れることを考えると、子どもがよく利用するカーペットコーナーは人工芝がよいと思われます。

カフェ



図書館を利用中に、「お腹が減った」とか「のどが渴いた」というとき、わざわざ図書館の外に出なくていいようにカフェを館内に設置します。また、図書館内にカフェを作ることで、調べ物や勉強の合間に息抜きできる空間ができます。そして本を読むためではなく、カフェで販売されているパンや飲み物を求めに人々がわざわざやってくるような商品を提供します。ぶらりと来た人もゆったりくつろげる空間を演出します。現在でも一部の図書館では喫茶室はありますが、販売されているもののおいしくないことが多い。質の高いものを提供するようにします。

とはいうものの、ただカフェを設置するだけでは面白くありません。図書館ならではの発想として、小説に出てくる料理や作家にまつわる期間限定メニューを出し、本や展示の紹介も行います。図書館を読書会やイベントの場として利用するなど、図書館とカフェとで連携して人の集まる空間を作っていきます。

自然光をうまく利用



蛍光灯の利用をなるべく控えて太陽光による明るさを得たい。採光を取り入れることによって、1日のサイクルや日本独特の四季、天候の変化を感じることができます。日が沈むのが早いと秋から冬に向かっているとわかりますし、「なんか暑いな」と思ったら14時だったり、館内にいながら外の感覚も感じ取れるようにします。

ガラス面を大きくし、ふんだんに光を取り込む造りにします。しかし、南側、西側をガラス張りにするとまぶしさや西日の影響があるため配慮も必要です。

屋上にはソーラパネルを付けて、発電に利用し、自然の力をうまく取り入れていきたい。

職員の休憩室



多くの図書館の図面を見ると寂しい箇所があります。それは職員の休憩室で、図書館利用者には馴染みがない場所です。そもそも休憩室がないところもあり、昼食は事務室で食べるしかない場合もあります。お昼過ぎになると職員が時間交代で事務室でお弁当を広げ、その近くでは別の職員が電話当番などの仕事をしていたりします。事務室には弁当の匂いが漂い、気軽に会話などでもきません。

カウンターに立っていると、利用者から無理難題を要求される場合もあります。首都圏の中央図書館によっては、土日は貸出・返却カウンターに常に行列ができて忙しいですし、職員はミスの無いように注意しなければなりません。疲れを感じることもあります。

リフレッシュのためにも、新たな企画を創り出すためにも、充実した職員の休憩室は必要です。冷蔵庫、電子レンジ、給湯完備だけではなく、テレビ、ソファやテーブルを配して各々がくつろげる場所を設けます。休憩時間はリフレッシュに専念し、次の仕事に当たれるような環境を整備します。

体調が思わしくないときや、少し休みたいときもあるでしょうから、仮眠室も設置したい。実際、15～20分間程度の昼寝をすると作業効率がアップするといわれています。このことから、仮眠室での昼寝を奨励します。

職員のためのスペースを充実させるために館長室は作りません。館長は、職員の動きを把握するため、事務室に机を設けるだけでよいでしょう。

カウンターワークだけでなくフロアワークも充実



従来、図書館の入り口付近にあるBDS（book detection system磁気を利用した図書館資料の亡失システム）は設置しません。図書館資料の盗難被害は、新聞に記事として掲載されることもあります。盗難防止のためにBDSを設置する図書館が多くなっており、その効果はあって、ある大規模館では「BDSを設置して紛失が今までの3分の1に減少した」そうです。

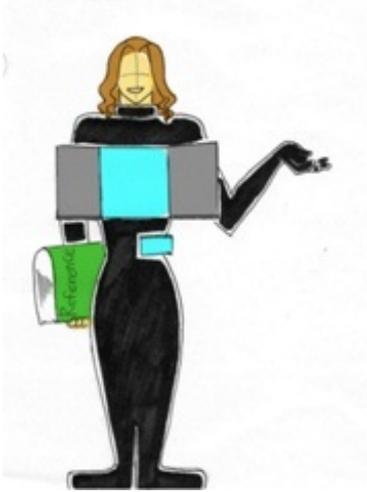
あえて、BDSを設置しないのは、図書館員のフロアワークを充実させることによって館内に目を行き届かせるためです。図書館員をカウンターだけに配置するのではなく、フロアにも配置し気軽に話しかけてもらえるようにします。配架、書架整理は見回りを兼ねます。配架や書架整理をしない職員もフロアに配置し、来館者の様子を見ながら声をかけたり、案内を行います。

館内はユニバーサルデザインを意識した物をなるべく設置するようにします。公衆電話やパソコン、トイレなどは、基本的に一人で使えるようにユニバーサルデザイン化します。

一方で、視覚障害者誘導ブロックは床につけません。高齢者や足腰が弱い方はつまずきますし、ベビーカーの通行にも不自由です。

誘導が必要と思われる時には、フロアワークを行っている職員がすぐさまかけつけ、対応します。視覚障害者だけではなく、助けを必要とする来館者に対応できるようにフロアを見回すのです。そうすることで、職員や来館者と声を交わすきっかけのひとつになります。ゆくゆくは図書館と来館者がつながることになります。

ロボット司書



図書館に人型ロボットを配置したいと思います。その理由は大きく2点あります。

1点目は危機管理の面です。図書館は女性が多く働いており、男性が少ないため問題のある利用者の対応に苦勞することもあります。職員が殴られ怪我をすることもあります。対応に苦慮するときに、ヒトそっくりのロボットが対応します。殴られても暴言を吐かれても、ロボットだからなんてことはありません。

2点目はフロアワークの強化です。すべての職員が図書館の専門家として配置されているわけではなく、図書館勤務が初めての人もあります。フロアにいて話しかけられてもうまく対応できないこともあります。そんなとき、ロボットなら必要な情報は入れているので回答ができることもあります。

子どもや高齢者にとっては、館内OPACよりも人型ロボットの方をおもしろがり、馴染みやすいと思われます。何より音声操作にも対応しているため、さながらヒトと会話をしているように自分が知りたい情報を得られることが最大の特徴です。

調べごとや問い合わせ内容をロボットに蓄積させれば、ロボットは必要なデータを瞬時に検索し、回答ができます。

館長と職員の距離

実務経験がなく、図書館に関しては素人の人が図書館長になる場合があります。実務を知らないため職員と話が通じないこともあり、運営に支障を来たしたり、職員からはただ椅子に座っているだけだと思われたり、職員の立場としては話しにくい雰囲気を出していたりと、館長に対するイメージはあまりよくありません。しかし、図書館によっては館長名が広く知られ有名なところもあります。

館長は雲の上の人ではありません。時間のあるときは積極的にカウンターやフロアへ出て利用者と接し、職員が日々こなしている実務を進んで行い理解することで、職員の働きやすさや利用者サービス向上に何が必要かを考えることができます。図書館に行ったときに館長がどの人かすぐわかれば、その図書館の館長は利用者から広く知られていることになるでしょう。

館長は職員とともにイベントを企画するなど、共に仕事をすることによって距離を縮める努力をします。また、職員に仕事の支障を来たさない程度に話しかけるようにします。悩みを抱えていないか、困っていることはないか、体調はどうかなど気にかけることによって、職場の良い雰囲気をつくり、一体となってサービスを提供していくことができます。館長になるからには、何かしらの専門知識や技能があるはずです。存分に能力を発揮できると思います。



図書館の専門家であることは大切ですが、外の様子も知らないと世間の感覚とはずれてきます。

環境教育のインタープリターは、これからの図書館サービスに参考になります。インタープリターとは、自然と人との仲介となって自然解説を行う人のことです。自然体験型の環境教育活動の企画や指導に当たっています。図書館に当てはめると、一部では実施されている単なる図書館のガイドツアーではなく、図書館資料を紹介するツアーです。インタープリターは、図書館資料と人を結びつけるためのひとつのヒントになります。

私たちの日常に溶け込んでいるコンビニエンスストアで働いてみることも勉強になります。POSレジスタと物流の流れは、図書館業務に置き換えると、資料選定や図書館システムの再構築のヒントになります。しかも、少数精鋭、接客、お客様対応など学ぶことは多くあります。

また、自衛隊体験生活は、自衛隊のことを知るきっかけになると同時に、組織として動くことの大切さや帰属意識を高めることができます。こういったことは、一般企業においても新人教育の一環として導入しています。

図書館業務に直接関係があるものとして書店があります。商品の陳列、売場のPOP作り、在庫確認、返本作業など出版流通の一部を知ることができます。

外部のことを知り、ノウハウを取り入れることは大切です。そして、他の業界では当然となっていることの後追いであることも自覚する必要があります。今後はできれば、図書館とは関係ない業界が、図書館の良いところを取り入れるようなことがあってほしいと思います。

電子資料について



これからの図書館は、紙の書籍と電子書籍を兼ね備えていくようにします。最近、電子書籍や電子出版が取り上げられるようになりましたが、すべてが電子化されて紙の書籍がなくなるわけではありません。選択肢が増えたと捉えるのが適切でしょう。しかし、電子書籍はまだコンテンツ量が少ないのが現状です。

電子図書館や電子書籍を考えるにあたっては、大学図書館で電子ジャーナルについてすでに取り組まれています。サイトライセンス、コンソーシアムがひとつヒントになるでしょう。機関リポジトリは、地域資料のデジタル化と提供のヒントになります。

しかし、欧米の図書館の先進的な取り組みや、日本の大学図書館の取り組みの良い部分を取り入れた後追いをただ実施するのでは芸がありません。

たとえば、地域の図書館の取り組みとして、図書館員が地域住民と協力してコンテンツを作る作業を行います。特に、地域の古い写真を住民から集めてデジタル化し、図書館のコンテンツにします。出土した土器や石器をデジタルアーカイブし、電子保存します。ある県立図書館で行っているように、民話などの口承文化をデジタル化します。ローカル色を打ち出し、インターネット上に紹介することによって、地域を知ってもらうようにします。

すでに一部の人たちの間でよく行われている自炊を、図書館でも行えるようにします。利用者が書籍を持参した場合に限り、裁断機とスキャナー、PCを貸し出します。

書店にないものも収集



自治体によっては自治体内に書店がない場合があります。その場合、書店で平積みされているようなベストセラーをそろえて、来館者に対して閲覧・貸出を行うことは図書館の役割のひとつです。

街中に書店がある場合は、書店では扱っていないものも少しは集めてみるようにしてはどうでしょうか。

それというのも、ほとんどの図書館が似たような品ぞろえであり、特徴がないからです。特徴がないことが特徴であると言われてしまえば、それは仕方ありませんが。

また、子どもの読書活動推進についてですが、幼児がひとりで図書館に来ることは現実的に少ないので、親子で図書館に来ることができるよう工夫が必要です。子育てをしている年齢層の分析を行い、仮に35歳前後とわかれば、35歳前後の男女が興味を示すような図書をそろえます。この方法は、流通しているものを一工夫して品ぞろえの構成を考える方法です。

書店にないものを収集する具体例として、神奈川県のある図書館は、社史のコレクションで有名で、1室に所狭しと社史が収められています。また、山梨県のある図書館は、国語学者である金田一春彦が、生前所蔵していた2万冊以上の資料が寄贈され、日本語や方言の資料が充実しています。館内には数多く資料が展示され、全国の方言を聞いたりクイズが楽しめるコーナーもあります。新宿区のある図書館では、業界新聞・専門誌・広報誌を400タイトル以上所蔵しています。

その図書館に行かないと見られないものがあるか分析を行い、ニーズを把握し、計画を立て実施してみてもどうでしょうか。まず、どのような資料が存在するのかを調査する必要があるでしょう。調査した後、あらたに購入するのか、寄贈の依頼を行うのか検討が必要です。寄贈依頼を行う場合、文言や依頼の仕方にちょっとしたテクニックが求められます。これから図書館で働く場合は、企業の営業のように折衝事も必要なスキルです。研究所や工場の倉庫に眠っている年史や報告書を集めて提供するという例もあります。

地域情報

地域情報の収集は、それぞれの図書館が独自性を出すチャンスでもあります。一方で収集や整理が追いつかない面もあります。

図書館で考え得る地域情報には、大きく次の3点があります。1、従来の図書館資料。2、地域の人。3、まちなみ。

1点目については、当たり前ですが、自治体などが作成する公文書等は、今後もそれぞれの部署から図書館に資料が送られてくる可能性があります。すみやかに検索できるようデータを作成し蔵書とします。

2点目については、地域には有力者をはじめとして、昔から住んでいる住民がいます。図書館を利用している人もいれば利用していない人もいます。まずは、お互いを知るために地域の会合等に積極的に職員は出席し、図書館を知ってもらおうようにします。話をする中で、従来の地域資料には記されていないことを聞くことができます。図書館で風習や慣わしを広める講演会や、立派な本とまではいかなくとも、簡易製本機があればタイピングしたものを出力し製本して1冊の本にできます。そして、蔵書登録を行い地域資料のコーナーに配架してもよいでしょう。

「そのような、紙に残っていない昔からの言い伝えを置くのか」という意見があると思いますが、地域資料や地域情報は後世に残すものであり、考現学の視点を持つこともこれからの図書館には必要です。自分の生まれ故郷やルーツを調べるときの手がかりになります。まとまったものにならなければ、電子データとして残しておけばよいのです。

3点目については、図書館の仕事のひとつとして、今現在の地域の写真撮影を行います。都市部では道路拡張工事などで建造物の立退きがあったりします。会話の中で「昔あそこに工場があった」と話題になったとき、写真があれば参考になります。また、自然が残っている場所では定期的に撮影していれば、環境の変化を記録できます。たとえば、「冬に湖が凍ったのは何年ぶりか」について知りたいときに、撮影した写真が残っていれば確実にわかります。

地域資料や地域情報は、図書館員が自ら動いて獲得するものです。地域の祭りやイベントに向いて記録をとります。逆に地域貢献の一環として、利用者の中でボランティアを募って一緒に行うのも面白いでしょう。このような取り組みは、図書館側はもとより、利用者側の視点も広げることになります。

資料の並べ方



図書館は、NDC(日本十進分類法)をもとに、ある決まった順番で棚に本が並べられています。たとえば、フランスの歴史は235と数字が振られています。しかし、いくつかの図書館を使っていると、NDCが機能していないように感じます。隣の自治体の図書館に行くと変わった記号が付与されていたり、ある図書館では日本史の分類は細かく小数点以下まで記していたりします。また、別の図書館に行くと日本の中世210.4を214というように3桁目のゼロを消して4桁目を繰り上げていたりします。自治体の個性が出ているのは小説でしょう。村上春樹の小説が913.6ムラ、J36ムラ、ムラだけなど、いろいろあります。

当たり前ではありますが、日本史の本が日本史のところに置いていなければ問題にもなります。

これまでの図書館は、一般の図書、辞典類、視聴覚資料など、それぞれの媒体別に分け、その中を十進分類順(NDC)で並べてきました。

思い切ってNDCの使用をやめて書架はおおまかなくくりだけにします。一般書と児童書などに分けません。図書には請求記号ラベルをつけず、大きく次のような5つのカテゴリーを設けます。

辞書辞典類：辞書、事典

世の中：宗教、哲学、政治、経済、法律、数学、天文

暮らし：心理学、医学、料理、ファッション、子育て、旅行、パソコン

歴史：日本史、世界史、各国史、地理、地域資料

芸術：芸術、デザイン、言語、文学、小説

資料にはすべてICタグを付け、書架にもアンテナをつけます。館内には携帯電話サイズの小型端末が複数置いてあり、来館者は小型端末を持ちながら検索を行えば、探している棚が反応して求めている資料にたどり着けます。従来のNDCの枠を超えて配架することができます。

棚の貸し出し

棚の貸し出しには大きく3点の構想があります。

1点目は、寄贈対策です。図書館には利用者からの寄贈が多い。ほとんどの図書館の対応としては、図書館資料として受け入れるかどうかは、図書館の判断に委ねてもらうと思います。寄贈をしたいと思っている側としては、上から目線のように思い寄贈するのが嫌になる場合もあります。受け取った側もたま一方でなかなか処理しきれないのが現状です。

地域の人の著作物については、収集基準に反しない限り原則図書館の蔵書として受け入れます。一般的な寄贈を申し出た人には、一定期間、館内の一部の棚を貸し出します。その棚に本に置いてもらい、残ったものは引き取ってもらうようにします。これは、よく入り口の端に見かけるリサイクルコーナーを棚に置き換えただけの方法です。利用者が手に取って持ち帰らなかったものは、それだけの価値しかないということです。残ったものは図書館の蔵書とはしない方法です。

2点目は、利用者や地域の団体が自分で用意した資料、館内にある資料を自由に選び、特集展示のように表現するコーナーを設けたい。もし、自分で用意する資料が貴重なものであればICタグを貼ってもらいます。図書館によっては図書館員による特集展示を行っていますが、テーマがなくなっていくのか、次第に内容が薄くなっているようです。

それならばむしろ、利用者や地域の団体が自分の得意分野と図書館資料を結びつけて、ある意味宣伝のためではありますが棚を一部貸し出ししたほうがよいと思います。人参を作っている農家が人参が売れなく困っているとき、人参に関する図書館資料と採れた人参を一緒に置き、誰が作っているのか、どこで購入できるのかを表示するようにします。POPなどは利用者に作ってもらうため図書館員としてはPOPの作り方の本や『店頭手書きボードの描き方・作り方』などの資料を紹介します。

3点目は、出版社との良好な関係を築くために、書店のように新刊書の展示スペースを棚に設けます。

そこで、図書館で購入したものの中から一部同じものを出版社に依頼して借り、館内閲覧用に置きます。たいていの場合、新刊書はすぐに貸し出され、予約も入るので図書館の棚に置かれていることはあまりありません。読み回されてから棚に戻るのも、たまたま来館した人が新刊書が置かれていないと思うのは当然でしょう。イメージとしては見本を手にとって読める感じです。



本書を読んでいただくと、2つの反応に分かれると思います。笑ってしまった方、ふざけた夢物語であると憤る方。前者は図書館利用者の方だと思います。「こんなことはできないものか」とそれぞれ利用者の視点で思い浮かべたでしょう。図書館勤務年数が長いベテランの方は、冷ややかな目で見られるかもしれません。

私たちは皆20代と若く、図書館勤務年数も短い。司書資格取得中の学生もこのチームのメンバーにいるため自由に考えていることを提案しました。その中には今すぐ実施できるもの、いくらか経費をかければ実施できるものがあります。

もし、読者の中で図書館創設に携わっている方がおられたら参考にさせていただければ幸いです。

本書を出すにあたっては、さまざまな方々から助言を頂くことができました。今回限りではなく、今後も皆さんとともに創造する機会が持てたらと思っています。

略歴

吉井 潤（図書館員）

1983年東京都生まれ。早稲田大学卒業後、内定が出ていた企業に就職する予定だったが、司書資格の図書館経営論の授業を担当していた小林是綱氏と出会い、図書館の世界に入る。特技は料理。

伊五沢 麻衣子（図書館員）

1982年生まれ。図書館では新聞雑誌コーナーを担当。切り絵やイラストを描き館内の展示の装飾に活用している。特技は切り絵。

久川 竜馬（個人事業者）

1985年愛媛県生まれ。早稲田大学留年後ITコンサル会社に就職した後、起業。専門分野はWEBサイトやiPhoneアプリ制作、WEBマーケティング。特技はコンピュータプログラミング。

森谷 亮太（学生）

1986年東京都生まれ。学部3年次に休学しカナダのリジャイナ大学に留学、文化人類学と経済学を学ぶ。留学中は大学に通うかたわらフライトスクールに通い、これまでの飛行時間は約45時間。帰国後、図書館でアルバイトを始める。特技は飛行機操縦。

山川 真央（学生）

1990年生まれ。大学に入学後、2011年1月まで図書館でアルバイトとして勤め、現在は就職活動中に専念中。特技はイラスト。

もし、20代の若者が図書館長になったら

<http://p.booklog.jp/book/25308>

著者：

Actualize L-1 Team (吉井潤、伊五沢麻衣子、久川竜馬、森谷亮太、山川真央)

イラスト 伊五沢麻衣子、山川真央

発行：2011年6月8 (水)

発行所：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/25308>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/25308>

©2011 Actualize L-1 Team